

論述文に現れた副詞の分析

——留学生と日本人学生の作文より——

渡 辺 史 央

要 旨

本研究は、大学で学ぶ外国人留学生を対象とした論理的文章の書き方（アカデミックライティング）指導のための基礎的研究である。論述文に現れる副詞について、外国人留学生と日本人学生との比較分析を行った。日本語の研究においては、従来、日本語の副詞については、山田文法における「情態」「程度」「陳述」の三分類が基礎的な分類と考えてよい。本研究でも、この三分類法をもとに、出現した副詞について分類および分析を行った。その結果、程度副詞の出現が多く見られ、程度が最高であることを表す「もっとも」と「一番」についての出現率が高かったこと、また文体差における語彙選択については、留学生、日本人学生ともに課題のあること、論述文の構成部分において特徴的な現れ方があることが明らかになった。

キーワード：副詞、論述文、留学生、日本人学生、アカデミックライティング指導

はじめに

昨今、日本の大学で学ぶ留学生への作文教育および、日本人学生へのアカデミックライティングの指導が注目されている。留学生が論文やレポートを書く際、問題となるのは以下のような点である。

1. 書く内容が浮かばない（アイディアの欠如）
2. 文体差を意識した適切な語彙・語句・文型の選択
3. 論の展開、文章構成に関すること
4. 接続詞、接続語の使用（論の展開に相応しい語の選択）についての知識
5. 引用とその方法に関する知識とスキル

本研究は、大学で学ぶ留学生のための論理的な文章作成（アカデミックライティング）支援を目標とした基礎的な研究である。近年における論文指導に関する研究は、専門分野の論文における文章構造に関するもの、使用される語彙や接続表現などを数量的に分析しているもの、指導における論理的思考のスキーマ構成に関するもの、また、日本語母語話者と日本語学習者の作文比較研究においては、文型の使用や接続表現の使用における違いや文の構造の比較分析に関するものなどがある。しかし、論理的文章にみられる副詞表現に焦点を当てた研究は管見の限りではない。そこで本稿では、学部留学生・留学生と日本人学生の論述文における副詞使用の

比較分析および考察を行う。

1. 論理的文章における副詞の位置づけ

論理的文章とはどのようなものか、ということについて、大西（1992）は、論理的文章を①記録・報告、②説明・解説 ③評論・論説であると述べた上で、論述・説得の文章は、③説明・解説に属するもとし、これら3種の叙述論理の形成の相違について以下のように述べている（下線は筆者による）。

記録・報告は、伝達しようとする「事実」そのものの構造に即応しようとするところから、文章の叙述論理が形づくられる。説明・解説は、伝達しようとする「事実」の法則性に即応しようとするところから、文章の叙述論理が形成される。それらに対して、評論・論説は、伝達しようとする「事実」の構造・法則性をふまえながら、表現主体の価値判断、主張に即応しようとするところから、文章の叙述論理が構築される。

（『表現学体系 表現指導の原理と方法2』p142）

さらに大西は、表現主体（書き手）の述べる論理ということについて、「論理のもつ客観性妥当性を前提にしながらも、主体の持つ主張、相手への説得意図という主観性を重んずるということである」と述べ、論述・説得の文章は、「主体と対象の論理が基本となる」としている。本研究で比較分析の対象となる論述文は、ある与えられたテーマについて、あらかじめ用意されたデータの中から自分の主張に有益なものを取捨選択して、論を組み立てていくというものであり、大西のいうところの「論述・説得」文に相当すると考える。つまり、具体的なデータ（事実）を踏まえつつ、それによって書き手の主張を構築していくものであり、そこには主体的な判断を含有するがそれはあくまで事実を論拠とした説得性のあるものでなければならないものである。

副詞は、品詞論においてはその扱いが難しく、何を持って副詞とするかは研究者によって認定の尺度が異なるが、一般的には山田孝雄の情態・程度・陳述という副詞分類が副詞研究の出発点となっていると考えてよい¹⁾。副詞は、それだけで自立していて、用言（動詞や形容詞）を修飾しその様子や程度について述べることを第一の働きとし、さらには叙述内容についての判断や態度などを述べ立てる働きをもつ。論述文において、副詞表現を用いるということは、事実や出来事の「様子（情態）」や「程度」について言及することであり、また書き手の主張を読み手に的確に伝えることをその働きとして期待できる。逆に、客観的記述が求められる論述文において、副詞の用い方を誤ると主観的なイメージを与え、説得性を失う可能性もある。論理的文章の指導においては、適切な副詞のリソースの提示と、その使用場面や使用方法について

の指導が重要となる。

本研究では、このことを踏まえ、留学生の副詞使用の実態を日本人学生のそれと比較しながら、その特徴と問題点について見ていこうと思う。

2. 分析と結果

ここでは具体的な分析の手順と方法について述べ、次に副詞の抽出と分類について述べる。さらに、分析の結果から、出現した副詞全体を概観する。

2-1 対象者と論述課題について

本研究で分析対象とするデータは、学部留学生1年生の必修科目である日本語（作文）Ⅱの受講者計42名の作文と日本人学生計30人の書いた作文である。留学生については全員、日本語の授業においてアカデミックライティングの指導を受けており、受講者については今回の論述文はその最終課題でもある。また、日本人学生については、筆者が担当した「日本語表現」受講者と自由協力者（1年生から4年生）が対象である。論述文のテーマは「日本は住みやすい国か」（字数制限800字）で、あらかじめ提示された図表から2つ以上のデータを用いながら自身の論を構築していくもので、作成の際には、文章構成、段落分けに留意しながら論述することを指示した。

2-2 分析の手順と方法

まず、作文データに現れた副詞について抽出した。品詞の中で副詞をどのように扱うかは、形態論的な側面、構文論的側面、また意味論的側面など、さまざまな角度から切ることができる。今回は品詞論を主とするものではなく、あくまで副詞の使用について記述的な分析の足がかり的なものであるので、副詞の抽出の方法としては、従来の先行研究などで通説となっていることをもとに、『現代副詞用法辞典』『日本国語大辞典』を参考に、副詞としての見出し語の有無も目安とした。まず、文章全体の中で、副詞がどの程度の頻度で現れるかについて調べると、表1のようになった。

表1 副詞の出現率（全体）

	留学生	日本人
出現回数	268 (32,565 字)	129 (18,082 字)
出現率	8.2	7.1

全体として、留学生の作文（以下、【留】）では、データの文字数あたり 268 例（延べ数）、日本人の作文（以下、【日】）では、129 例（延べ数）現れた。これを 100 字あたりの出現回数で換算すると、出現率はそれぞれ 8.2 例、7.1 例となり、副詞の使用頻度は若干差で留学生のほうが日本人学生より高くなった。

2-3 抽出した副詞の分類

副詞の分類については、従来の山田文法における三分類を副詞分類の始まりとし、近年ではいくつかの捉え方がなされている。いずれにしてもそれらの主な考えとしては「命題内で働くもの」と「命題外で働き、話し手の評価や伝達態度といったモダリティ領域に関わるもの」を基準とした二分類法が主流である。また、それに加えて「時に関する副詞」を別立てする考えもある²⁾。本稿では、このことを踏まえつつ、作文データに現れた副詞を「情態を表す副詞」「程度を表す副詞」「陳述性（モダリティ）に関わる副詞」にわけ、これらの副詞の出現状況を調べた。その結果が表 2 である。本稿では、山田文法におけるいわゆる「情態副詞」「程度副詞」「陳述副詞」といった分類を基本的に踏襲しているため、本稿でも便宜上、このように呼んでおくことにする。

各副詞の出現状況については、後に言及することとして、まず、それぞれの副詞について概観しておく。

作文に現れた情態副詞（一部）

変化や動作の様子：だんだん、徐々に、年々、明らかに、まさに、実際、堂々（と）、それぞれ、きっちり、すぐに、完全に、よく など
 量の多寡や数に関するもの：たくさん、多々、ほぼ、およそ など
 時や頻度に関するもの：もともと、いまだ、かつて、現に、 など

情態副詞は、「動作や変化のしかた（様態）、あるいは出来事の付随的なありかた（情態）を表して、主として動詞を修飾する副詞」³⁾である。ここでは、情態副詞を「変化や動作の様子に関するもの」「量の多寡や数に関するもの」「時や頻度に関するもの」とし、情態副詞に代表されるものとして抽出した。「たくさん」「ほぼ」については、程度副詞との見方もあるが、「高い」といった典型的な形容詞を修飾できるかどうかを一つの目安として考え、情態副詞に入れている。

また、「よく」は「日本人はよく働く」といった頻度や継続時間が長いことを表す「いつも」に置き換えられるような頻度を表す用法と、「ここから海がよく見える」といった見え方（様態）に関するもののみを対象とし、「日本のシステムはよくできている」といった「うまく」に置き換えられる形容詞の用法は除外した。

作文に現れた程度副詞（一部）

程度が極限的に高いことを表すもの：極めて、非常に、大変、すごく、相当、など
 程度がある程度高いことを表すもの：かなり、けっこう、ずいぶん、比較的 など
 程度が低いことを表すもの：ちょっと、少し、あまり など
 特に二者の比較の意味合いが強いもの：もっと、さらに、より など
 特に三者以上の比較の意味合いが強いもの：一番、もっとも、ずば抜けて、ダントツで など

程度副詞は、属性を表す語に先行し、その属性の程度限定を行う副詞である。典型的な形式としては形容詞述語にかかるものが多い。程度を限定するとは、なんらかの基準をもとに、その属性の程度の度合いを決定づけることである。また、「XはYよりZ（属性語）」といった比較構文にたつことができるかどうかといった構文的特徴から下位分類されることもある⁴⁾。なお、今回は量的概念を持ち合わせている程度副詞については、量的用法についても対象とした（例：「かなり食べた」）。

また、「ずいぶんな人」などといった特殊な形容詞としての用法は除外した。「さらに」については副詞としての用法（「さらに高い」）と接続詞的な用法（「さらに、次の表を見ると～」）がある。ここでは、副詞としての用法で現れたもののみを対象とした。

また、量的概念をもつものについては、形容詞的な用法として用いているものについては抽出対象としている。例えば、「かなり」は、「かなり高い」といった副詞の用法と「かなりの量」といった形容詞的な用法で現れたが、いずれも「程度がある程度高い」という意味用法を含有するとし、これらについても抽出した。「あまり」については、否定語との共起を条件とするが、形容詞を後接する用法であるので程度副詞として扱った。

作文に現れた陳述副詞（一部）

推量：たぶん、おそらく、など
 疑問：なぜ、どうして、一体、果たして、など
 説明：つまり
 条件：仮にも、いくら、いかに、など
 否定：けっして、必ずしも、全然 など
 限定・強調：ただ、たった、もう など
 とりたて：特に、主に など

山田は、情態副詞や程度副詞を、属性語にかかわる副詞として、「属性副詞」と称し、属性語よりも文の叙述の陳述的側面に積極的に関わるものとして「陳述副詞」を立てている。「陳述性」ということについては、これまでもさまざまな議論があるが、文の「コトガラの」側面に関わる性質から、「命題外副詞」「文副詞」とも呼ばれることもある⁵⁾。そして、これらの副詞が陳述

的側面に深くかかわる現れとして、文末にモダリティ形式を伴うといったことが特徴的だとされる。しかし、必ずしも文末表現との共起を条件としない捉え方もあり、意味論的な立場から「主観を表す副詞」や「評価性」「とりたて性」といったものとの関わりから捉えた広義の見方もある⁶⁾。陳述副詞の典型的なものとしては、文末表現を伴うタイプのもので、たとえば、「おそらく」「たぶん」などが、文末に「～だろう」という推量のモダリティ表現形式をとったり、「決して」が「～ない」と否定の形式を伴うなどである。ここでは、推量・否定といった特定の表現との共起が比較的可能なものだけでなく、「限定」や「取り立て」といった話し手の主観的要素が強く表れるものも広義の陳述性とかかわる副詞として挙げてある。「全然」については、形容詞との共起が基本的には一般的ではないと考え、陳述副詞として分類した。

今回、以下のようなものについては抽出対象外としている。

- ・「たとえば」「もちろん」などは前後の文に関係づける接続詞的な用法を色濃く持つもの。
- ・時の副詞に関するものとして、文頭に現れる「最近」「近年」「現在」など。
- ・「そう・こう・どう」などいわれる指示用法をもつもの。ただし、「どうやって」は疑問表現と呼応関係をもつ陳述副詞として抽出した。
- ・数量を表す名詞の副詞的用法をもつもの（例：「りんごを三つ買った」）。

表2 出現した副詞と出現回数

副詞表現		留学生	日本人	情態副詞	もともと	2	0	
		出現回数	出現回数		そもそも	0	1	
情態副詞	だんだん	7	0		かつて	0	1	
	徐々に	2	0		すぐに	0	1	
	年々	1	3		いまだ	0	1	
	おおいに	2	0		現に	0	1	
	明らかに	2	1		実際に	1	5	
	まさに	0	1		程度副詞	大変	0	2
	堂々	1	1			とても	0	7
	きっちり	0	1			非常に	7	2
	よく	8	1	極めて		0	1	
	完全に	2	0	相当		2	0	
	まったく	0	1	すごく		1	0	
	ほぼ	6	1	めっちゃ		1	0	
	ほとんど	1	2	極端		1	1	
	およそ	1	0	かなり		5	4	
	約	6	7	ずいぶん		1	0	
	大幅に	1	0	けっこう		2	0	
	たくさん	2	5	わずか		4	1	
	多々	0	1	やや		2	0	

程度副詞	あまり	5	4	陳述副詞	全然	1	0
	少し	0	0		果たして	1	2
	ちょっと	1	0		必ずしも	0	1
	もっと	7	2		本当に	12	5
	さらに	2	1		もはや	3	0
	より	2	0		いかに	2	2
	はるかに	0	1		やはり	3	6
	ますます	0	1		今や	1	0
	圧倒的に	1	1		いったい	3	1
	比較的	1	1		どうして	1	0
	一番	76	16		なぜ	4	4
	もっとも	43	12		つまり	8	4
	ダントツで	0	1		仮にも	0	1
	ずば抜けて	0	1		ただ	1	0
					たった	1	0
陳述副詞	たぶん	0	1		もう	3	2
	おそらく	0	1		とくに	5	0
	きっと	2	0		主に	2	0
	確かに	2	2				
	決して	4	3		合 計	268	129

表 3 副詞の出現率（全体）

	留学生	日本人
情態副詞	45 (268)	35 (129)
出現率	16.8	27.1
程度副詞	164 (268)	59 (129)
出現率	61.2	45.7
陳述副詞	59 (268)	35 (129)
出現率	22.0	27.1

※出現率は副詞全体の出現回数の中に現れる延べ回数を示す。

2-4 結果と考察

副詞全体で見ると、程度副詞がもっとも出現率が高く【留】で全体の6割強、【日】でも45%を占めた。程度副詞の出現率が高くなったことの理由として、程度副詞の中でも「一番」「もっとも」といった三者以上の比較から程度性が最高度であることを表す程度副詞の出現率がきわめて高い数値であったことがある。「もっとも」「一番」は、具体的数値からその程度性について客観的に評価を下す表現として論述文において選択されやすいことと関係があると思われる。

また、上の表を見ると、日・留両者の三者の副詞のうち、留学生のほうが使用頻度が高いのは程度副詞のみである。なぜこのような結果になったのかは、留学生の母語における副詞表現の影響などもあると考えられる。

【留】において、次に出現率が高いのは、陳述副詞の類である。一方、【日】においては陳述副詞と情態副詞が同じ割合で現れた。両者を比較すると、出現の度合いとバリエーションは以下ようになる。

＜副詞の出現の度合い＞

【留】 程度副詞＞陳述副詞＞情態副詞

【日】 程度副詞＞情態副詞＝陳述副詞

＜異なり数＞

	情態	程度	陳述
【留】	16	19	19
【日】	18	18	14

論述文では主観的要素は排除されることが望まれる。程度表現である程度副詞は、絶対的な程度でない限り、程度の度合いの決定づけには書き手の主観や判断が割り込む。さらには書き手の判断や評価、伝達態度などのモダリティ要素を含んだ陳述副詞についても同様である。したがって、副詞はその用い方を誤れば、論述文において信頼性をなくしてしまう可能性がある。次に、各副詞においてその現れ方における【留】【日】の相違について見ていく。

3 三副詞の出現について

本章では、情態副詞、程度副詞、陳述副詞の出現についてさらに個々に見る。

3-1 程度副詞

出現回数の上位5位は以下の通りである。また、出現した程度副詞全体に占める出現率も示す。

表 4

【留】の程度副詞上位と出現率				【日】の程度副詞上位と出現率			
順位	語	出現回数	出現率	順位	語	出現回数	出現率
1	一番	76	46.3	1	一番	16	27.1
2	もっとも	43	26.2	2	もっとも	12	20.3
3	非常に	7	4.3	3	とても	7	11.9
3	もっと	7	4.3	4	かなり	4	6.8
4	かなり	5	3.5	4	あまり	4	6.8
4	あまり	5	3.5	5	大変	2	3.4
5	わずか	4	2.4	5	非常に	2	3.4

【「もっとも」と「一番」】

【留】【日】とも、出現した程度副詞の中で、最も出現回数が多かったのが「一番」「もっとも」である。【留】においては、出現した副詞 268（延べ数）のうち、「一番」は 76 例、「もっとも」は 43 例出てきており、両者を併せると 119 例で、これは程度副詞全体において 72.6%の出現率であり、副詞全体で見ても約 44.4%の出現率である。一方、【日】においても、「一番」が 16 例、「もっとも」が 12 例（計 28 例）で、両者を併せた全体における程度副詞全体に占める割合は 50%であり、これは副詞全体でも 21.7%を占める。程度副詞に代表される程度を表す表現というのは、ある属性についてその程度の限定であり、それは話し手（書き手）の判断によって行われるものであるから、主観的要素を含みやすい。したがって、客観的な表現が好まれる論述文においては、程度副詞はその使い方によっては、主観的なイメージを与えるため、使用は避けられる傾向にあるといつてよい⁷⁾。

「一番」「もっとも」は、三者以上の中で程度（や数量）が最高である様子を表す程度副詞である。ことに論述文においては具体的数値やデータなどからそれが顕れていることが多く、これらの副詞は主観的で評価的な要素を排除した客観的な表現として用いることができるものである⁸⁾。したがって、必然的に使用頻度が高くなるものと思われる。

また、文体差に注目すると、「一番」は日常会話的でくだけた表現であり、これに対して「もっとも」は、公的な場面や論理的な文章などで用いられる硬い表現である。したがって、論述文においては、「一番」よりも「もっとも」が用いられるべきである。そこで、この両者の使用状況を見てみると、両者の内訳は、【留】では 119 例中、「一番」は 76 例、「もっとも」は 43 例あり、「もっとも」の使用率は約 36.1%、一方【日】では、28 例中、「もっとも」は 12 例で、その使用率は、約 46.2%で、日本人学生のほうが書き言葉としての表現を取捨選択し、使用していることがわかる。論述文指導においてはこのような文体差に着目した指導の必要性が必須である。

【「とても」「非常に」など】

また、程度が高いことを表す「非常に」「とても」について、文体差ということに注目すると、【日】では、「程度が高いことを表す表現」として「とても」と「非常に」の使用比率は7:2で、一方、【留】では、「とても」を使用した例はなく、「非常に」を使用した例が7例見られた。ここから【日】は話し言葉としての要素が高い「とても」を頻繁に使用し、【留】では書き言葉としての「非常に」を語彙選択して使用していることがわかる。ちなみに、同様に程度が高いことを表す類義語としての書き言葉的要素の強い「きわめて」「たいへん」については、【日】で1例ずつ、話し言葉である「めっちゃ」は【留】で1例現れた。

森山（1985）では、「非常に」と意味概念をほぼ共通する「とても」については言及がないが、「*料理がとてもある」とは言いがたいことから、「非常に」と同様に森山が言うところの「純粹程度副詞」に属すると考えられる⁹⁾。また、「大変」については、純粹程度副詞に分類されており、「大変行きたい」を自然な文として認定しているが、これには少し疑問がある。「大変行きたいと思っています」とすれば、若干据わりの良さを感じる。また、「極めて」については、

「*範囲を極めて広げている」のように、他動詞との共起が難しいことを挙げ、限定の対象となる動詞が主体側のものであるかがどうかを問題視している。従来の作文指導において、「とても/大変」（話し言葉）、「非常に/極めて」（書き言葉）といった単なる文体差を主眼に置いた書き換えのみを指導するのでは、文脈上の矛盾を生じさせてしまう恐れがある。論文指導などでは、文体差ということと別に、個々の程度副詞の意味機能をもう少し詳しく分類し、作文指導に導入していく必要があると考える。

【「かなり」「ずいぶん」「けっこう」】

程度がある程度高いことを表す、類義語としての「かなり」「けっこう」「ずいぶん」の現れ方について見る。『現代副詞用法辞典』では、「かなり」「けっこう」「ずいぶん」はいずれも「程度が平均を上回る」表現としており、「かなり」は客観的な表現で「計量できるような程度」について用いることが多く、「けっこう」は「事前の予測に反して」といった意味合いをもつと説明している¹⁰⁾。【留】においては、「かなり」が5例、「ずいぶん」が1例、「けっこう」が3例出現しており、一方【日】においては、「かなり」が4例現れ、「ずいぶん」「けっこう」については出現しなかった。これらの類義語表現については、なぜ、留学生が語彙選択において、話し言葉としての要素が高い「けっこう」や「ずいぶん」を選びやすいのか、意味的な用法をどのように理解し、取捨選択しているのか、さらに詳細な分析を進める必要がある。以下、【留】からの例を挙げておく。

(1) もちろん、そのような関係が比例の関係になる場合もけっこうあります。

(2) 図3の研究によると、日本の社会では、仕事がたくさんされて、人々がプレッシャーが高くなって、我慢できなくて、殺人してしまう事件もけっこう出てくると考えられ

る。

- (3) 表1は合計特殊出生率を示している。日本の出生率は1965年以降急激に減少し、2005年には1人の女性あたり1.29の子どもを生む平均数になっており、ほかの国よりけっこう出生率が低い。

3-2 情態副詞

【留】【日】における情態副詞の現れ方を見ると、【留】に「だんだん」が7例あることが特徴的である。【日】にはこの副詞の使用は見られなかった。「事態がゆるやかに進行していく様子」を表す副詞は、書き言葉としての「徐々に」「次第に」があり、論述文においてはこれを語彙選択することが求められる。【日】には事態の進行を表す副詞として「年々」の例が3例あり、【留】では1例のみであった。下に情態副詞の上位を示しておく。

表5

【留】の程度副詞上位と出現率				【日】の程度副詞上位と出現率			
順位	語	出現回数	出現率	順位	語	出現回数	出現率
1	よく	8	17.8	1	約	7	20
2	だんだん	7	15.6	2	たくさん	5	14.3
3	ほぼ	6	13.3	2	実際に	5	14.3
4	約	6	13.3	3	年々	3	8.7
				4	ほとんど	2	5.7

上位にあがったこれらの副詞の大半は、論理構成におけるデータ提示とデータ解説部分に現れている。文章の構成上、データや図表の解説部分が根拠提示の内容となるため、数値の大きさや変化を表す表現が多くなったと思われる。ただ、【留】には、テキストで学習した概数表現や数値の評価を表す副詞表現を故意的に使おうとする傾向が見られたが、言い換え表現を習っていたにもかかわらず「徐々に」「次第に」が選択出来ない傾向があり、定着度の低さが目立った。「だんだん」の作文例を挙げておく。

- (4) 図4から見ると、老後不安の問題もだんだん改善されていく。
- (5) これからの日本の社会が少子化や高齢化が進み、労働者の人数がだんだん減少し、経済崩壊が起こる可能性があると言われる。
- (6) 以上のことから、日本という国が社会面や経済面などだんだん改善しつつあることがわかる。

3-3 陳述副詞

作文中に現れた陳述副詞類の上位と出現率は以下ようになった。

表 6

【留】の程度副詞上位と出現率				【日】の程度副詞上位と出現率			
順位	語	出現回数	出現率	順位	語	出現回数	出現率
1	本当に	12	63.2	1	やはり	6	42.9
2	つまり	8	42.1	2	本当に	5	35.7
3	とくに	5	26.3	3	なぜ	4	28.6
4	決して	4	21.1	3	つまり	4	28.6
5	なぜ	4	21.1	4	決して	3	21.4

【留】【日】ともに、「本当に」の出現が多く、【留】【日】双方の論述文において、計 17 回（【留】では 12 回、【日】では 5 回）現れた。「本当に」の用法については、大きくわけて「この本は本当に高い」といった評価的要素を含み、命題に内包する属性について判断を下す用法と、「あの人は本当に日本人だろうか」といった、真偽判断を表出するモダリティ表現と共起して、命題で表される事態に対する判断を下す用法がある。日常的使用頻度の高いこの表現が大学生のレポートなどでも散見されることがあり、中には適切な使用がなされている場合もあるが、日常表現としての枠を超えていないものも多く、主観的な印象を与えてしまいレポートや論文には不適切なケースがあることを考えると、適切な使い方の指導の必要性があると言える。

「つまり」は接続詞と副詞との境界線上にあるものと考えられ、今回対象としてあげなかった「たとえば」「もちろん」などもあわせてその現れ方について比較検討の余地を残すと言える。

4 構成部分における副詞

副詞について、論述文のどの構成要素に現れているかについて主要な副詞についてみる。論述文の一般的な構成モデルは以下のようにまとめられる。

論述文の基本的な構成モデル

序論の役割

- A. 必要な知識を確認する（背景説明）
- B. 取り上げる問題は何かを示す（問題提起）

本論の役割

- C. 結論を述べる（意見）
- D. 事実（データ）と意見を使って論拠を示し、なぜそのような結論になるのかを証明する（論拠の提示）

結びの役割

- E. これまでに述べた話の内容を確認する（行動の確認）
- F. 話の成果を足がかりとして、次の段階では何をしたらよいのかを示す（今後の課題）

（『論文ワークブック』 p.28 より一部改変）

【「一番」「もっとも」】

「一番」「もっとも」が論述文の上に示す構成要素のなかで、どの部分に現れやすいかを見ると、本論部分における論拠提示部分 D におけるデータの具体的説明をする部分でもっとも多く、これら二つの副詞を併せた出現数は【留】で 93 例（119 例中）、【日】で 27 例（28 例中）であった。また、後接する語の種類としては「高い／低い」「多い／少ない」といった数字からわかる量や数の多寡について述べるものがほとんどであった。また、A のテーマに関する背景知識に関する記述においては、いずれも「日本はもっとも進んだ国のひとつである」といった例や「日本は世界の中で一番の長寿国だ」といった一般論からテーマの導入を行おうとする場面で見られた。また、C の「結論・意見」部分では、【留】で 3 例、【日】で 2 例見られたが、論拠を提示したのち、自身の結論として述べた場合で、いずれも「～と考えられる」「～と思う」などといった文末表現との共起が見られた。

【「本当に」】

「本当に」については、【留】【日】双方併せた 17 例中 9 例が序論部分における「問題提起」部分で現れていたことがわかった。

文型パターンとしては、9 例とも「本当に～なのか／なのだろうか」といった疑問表現をとるものであった。この文型パターンは、典型的な問題提起文の文型パターンである。【留】の例では、「本当に～だろうか」の形式で出てくる例が多く（問題提起文の 6 例中 5 例）、【日】の場合は「本当に～なのか」「本当に～と言えるか」「本当に～あるのか」と文末の表現文型が分散さ

れていた。また、【日】では、「果たして、本当に～だろうか」といった他の副詞との共起の例が1例見られた。

今回の作文課題の論点である「日本は住みやすい国か」に関する論述文の序論では「果たして住みやすい国なのか」「一体住みやすい国であると言えるのか」など、他の副詞との共起も可能性としてはあった。しかし、問題提起文によく用いられる可能性の高い「果たして」「一体」などと比して、「本当に」は【留】【日】双方において使用度がもっとも高かった。この副詞が普段の会話やメール文などにおいて日常的にも使用頻度の高いものであり、文体差を意識した語の選択を行う以前に、半ば無意識的に選択し使用している可能性があると考えられる。誤用とまでは言えないが、文体差を意識した語の選択を指導すれば他の副詞の選択の可能性も出てくると考えられる。

その他の8例については、いずれも書き手の意見や判断に関わる部分（CおよびD）で用いられていた。いずれも一定の文末表現との共起は見られず、「住みやすい」「裕福だ」などといった形容詞述語にかかるものであり、これは上に述べた「命題に内包する属性についての判断を下す」、一種の評価的な要素を含んでいるものであると考えられ、情態副詞や程度副詞との境界線にあるものである。

5 まとめ

以上、留学生と日本人学生の書いた論述文から、副詞の使用状況についてみてきた。ここからわかったことは、1) 留学生と日本人学生の論述文において、副詞の出現頻度は、両者とも程度副詞がもっとも多かったこと。2) その中で「一番」「もっとも」といった三者以上の中で最高程度であることを表す副詞の出現頻度が高く、これはこれらが程度副詞の中でも客観的表現であることと関わりがあること。3) 文体差を意識した使い分けについては留学生、日本人学生とも課題が残ったこと、4) 構成要素別に見ると各副詞の現れ方に特徴があること、である。

本研究によって、専門日本語教育の一環でもある留学生への論述文指導における副詞のリソースの提示の足がかりがつかめたと考える。また、今後は個々の副詞表現について、さらに記述的研究を進めていくとともに、対象を学術論文や論説文などに広げ、副詞表現がどのように使われるのかさらなる分析を進めていくことで、教育現場における作文指導に有効なシラバスの構築につなげていきたいと考える。

注

- 1) ただし、山田の分類では、これら三種の副詞以外に、いわゆる感動詞、接続詞にあたるものを「感動副詞」「接続副詞」とし、副詞として別立てしている。これは、これらの語が格変化や活用がなく、

他の語の表す内容を詳細に規定するといった副用言としての性質を十分に持っていることをその根拠としている。

- 2) 「しばらく本を読んでいた」「すぐに気がついた」「かつてそこは荒地だった」など、事態がどれほどの時間量を占めていたか、また実現にどれほどの時間量を要したかなどを基準にするものである(『日本語学研究辞典』p216)。
- 3) 工藤(2000)p.166 参照。
- 4) 渡辺実(1990)では、程度副詞をその程度判断のしかたから、「発見系」と「比較系」に二分し、さらに、前者を「とても類」「結構類」、後者を「多少類」「もっと類」と分けている。さらに、「評価性」という観点から「非評価系」に「とても類」「もっと類」、 「評価系」には「結構類」「多少類」と体系づけを行っている。また、渡辺史央(1997)では、「もっと」「ずっと」「さらに」に代表される「XはYよりZ」といった比較構文にしか現れず、「他との比較」の概念が強いものを比較性のもっとも強いタイプとし、「比較性程度副詞」と称し、その構文論的特徴について三者を比較分析した。
- 5) 渡辺(1971)の「誘導の副詞」の理論、「文副詞」については澤田(1978)、中右(1980)などが先行研究としてある。
- 6) 工藤(2000)は、<陳述性>について「単語や単語の組み合わせが、言語活動の最小単位である『文』として成り立つために持たされる、話し手の立場から取り結ばれる文法的諸特性」(p.180)とし、陳述副詞の類を、「叙法副詞」「評価副詞」「とりたて副詞」と下位分類している。
- 7) 程度を表す表現が主観的要素を含むことについて、森田(2008)は以下のように述べている。
 “程度”というのは決して客観的な状況そのものではない。対象をどの程度にとらえる判断は、あくまで話者の主観によるもので、日本語にその種の語彙が豊かにあるということは、客体界の事態を己の目に映じた有り様として心のフィルターに掛け、細かく言い分けているためである。(p.280)
- 8) ただし、これらが主観的な表現として用いられることもある。「やっぱり温泉が一番だ(一番いい)」。また、「もっとも」は最高のものが複数ある場合でも用いられる。(「清水寺は日本でもっとも観光客が多く訪れる寺院の一つだ」)。
- 9) 森山(1985)は、程度副詞が、程度限定の対象となる動詞の意味によって、量的なものか持続時間かなどそのあらわすところが違うといった点に注目し、「量的程度副詞」と「純粹程度副詞」といった二分類を行っている。それについて、森山は、「金がかなり／ずいぶん ある」といった存在文に共起できるかどうかといった観点から、共起可能なものを量的概念を内包するとし、「量的程度副詞」と名称し、さらに「*金が大変／非常に／ある」のように、存在文に現れ得ない程度副詞を量的概念を内包しないものとして「純粹程度副詞」と名付けている。
- 10) 『現代副詞用法辞典』(p.123, p.382)

参考文献

- 大西道雄(1992)『論述・説得の文章を作る行為の指導』『表現学大系 各論篇第30巻 表現指導の原理と方法2』, 表現学会編, 教育出版センター
- 工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的タイプ」, 『日本語の文法3 モダリティ』, pp163-234 明治書院
- 澤田治美(1978)「日英語文副詞類(Sentence Adverbials)の対照言語学的研究—Speech Act 理論の視点から—」, 『言語研究74』, 日本言語学会
- 中右実(1980)「文副詞の比較」, 『日英比較講座 第2巻』, 大修館書店
- 森田良行(2008)『動詞・形容詞・副詞の事典』, 東京堂出版
- 森山卓郎(1985)「『量的程度副詞』と『純粹程度副詞』」, 『国文学会誌第20号』, 京都教育大学
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』, 宝文館出版
- 渡辺史央(1997)「『もっとずっとZ』をめぐって—『比較性』としての意味機能の観点から—」, 『日本語・日本文化23号』, 大阪外国語大学留学生日本語教育センター
- 渡辺実(1971)『国語構文論』, 塙書房
- 渡辺実(1990)「程度副詞の体系」『国文論集23号』, 上智大学国文学会

- 国語学会編 『国語学大辞典』, 東京堂出版, 1980 年
飛田良文・遠藤好央・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺 (編) 『日本語学研究辞典』, 明治書院, 2006 年
飛田良文・浅田秀子著, 『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版, 1995 年
アカデミック・ジャパニーズ研究会編著, 『大学・大学院留学生の日本語 4』, スリーエーネットワーク, 2005 年
浜田麻里・平尾得子・由井紀久子著, 『大学生と留学生のための論文ワークブック』, くろしお出版, 1997 年

Analysis of the use of adverbs in essays written by undergraduate international students and Japanese students

Shio WATANABE

Abstract

This paper is a basic research with the goal for support of logical writing to undergraduate students studying in universities.

In this paper, focuses on adverbs of essays written by undergraduate foreign students and Japanese students, conducted a comparative analysis for its use.

Based on the classification of adverbs in Yamada-Grammar, It was found that Degree adverbs were most frequently appeared in both of essays. The reason of it is, "most (MOTTOMO)" "best (ICHIBAN)" can easily be listed with lots of adverbs and positively impact the numbers objectively.

Furthermore, about select a different vocabulary for writing-style-conscious, it turns out that there is a need for teaching it to Japanese students not only to foreign students.

In the future, advancing research and writing of the Japanese adverbs, in teaching logical writing, it is hoped to consider how to provide resources adverbial expressions.

Keywords : adverbs, academic essays, foreign students, Japanese students, guidance of academic writing